

## 33. 津波の日に寄せて

# 医事万華鏡

10月7日、関東地方は震度5強の大きな揺れに見舞われました。実に、東京23区で震度5強の揺れを観測したのは、東日本大震災以来だそうです。また、10月20日には阿蘇山で噴火が発生しました。そんな中訪れる11月5日は、「世界津波の日」。地震と津波は密接な関係にあるため、津波について考えることは同時に地震について考えることです。自然災害が頻発する昨今、現行の防災体制の弱点を洗い出し、構築に向けた取り組みが期待されていると言えるでしょう。

ところでこの「世界津波の日」が11月5日に制定された理由は、わが国のある逸話と関連があるそうです。

時代は幕末、徳川斉昭をはじめ吉田松陰や橋本左内らが弾圧された安政の大獄から遡ること4年の1854年、11月4日に駿河湾から四国南海までの海域の溝（南海トラフ）を中心に大地震が発生しました（安政東海地震）。またその翌日の5日には、再び南海トラフ付近で大地震が発生しました（安政南海地震）。この両地震によって、関東から近畿地方沿岸、更には内陸に至るまでの広範囲にわたって家屋の倒壊や火災、液状化や津波被害と共に数千〜1万人以上の人的被害が発生しました。そしてその揺れは遠くは淡路

島から四国までを望む紀伊国有田郡広村（現在の和歌山県有田郡広川村）にも及んだそうです。

その時の様子を示す資料によれば、11月4日の揺れで、広村の村人たちは津波を警戒し神社

に避難し、大きな被害はなかったそうです。しかし5日の地震では津波が発生し、その津波は広村に押し寄せました。そこで醤油製造業を営んでいた濱口儀兵衛家（現在のヤマサ醤油）の当主であり後の明治政府では初代逓頭（後の郵政大臣に相当）も務めた濱口梧陵は、村人に津波からの避難を呼びかけると共に、安全な避難場所と見込まれていた丘の上で、積み上げた稲の束を燃やし、丘の位置を村人に知らせました。そのお陰で、直後に再来した最大の津波から村人を守ることができたと言われています。

ただ津波による被害は甚大なもので、家屋や田畑が押し流された結果、多くの村人が離村を考えざるを得ない状況となりました。そこで梧陵は私財を投じ、津波対策の堤防建設に着手。4年かけ完成した堤防は、1946年に発生した昭和南海地震で発生した津波から村を守ることに寄与したと言えます。なお、この堤防は津波対策だけでなく、生活の糧を失った村人を救済し、共同体を維持する効果もあったそうです。

そんな梧陵の取り組みは、津波防衛以外にも、復興事業や将来の備えの模範の一つであるとも言えます。今こそ濱口梧陵の業績や信念に思いを致し、「南海トラフ」への教訓とすることが求められています。

（JMS主幹・野村元久）

